

familiarityと心理的距離についての一考察

—デジャヴ体験という視点から—

加藤 奈奈子

1. はじめに

ものや対象に対し、どこか近い感覚を抱く時がある。それは何か大切な形を持って存在しているものであるかもしれないし、言葉のようなものであるかもしれない。日常場面と同様に、心理臨床の場においても、そのような感覚をクライアントやセラピストのどちらかが抱き、もしくは共有するようなこともあるであろう。例えば、クライアントが面接室を出る刹那に、ふと箱庭のアイテムに目を留め、それに触れる時、どのような感覚がクライアントの中に、そして心理臨床の場に起こっていると考えることができるのであろうか。本稿では、こういった体験の内なる感覚としてのfamiliarityに焦点をあて、それがいかなるものであるか論じることを試みる。

2. familiarityとは

"familiarity"とは、どういった感覚なのであろうか。リーダーズ英和辞典第2版によると、familiarity -n

1. よく知っていること、精通、熟知、知悉 <with>
2. 親しみ、親交；懇意、心安さ；なれなれしさ，無遠慮；
なれなれしい行為[ふるまい]；みだらな[性的な]関係

familiarityは、with以下の対象について、よく知り馴染んでいるという状態を示し、さらに対象に対して、個人の心的な価値付けがなされ、それに基づいて、対象に向ける近しい行為や行き過ぎを示す状態という形で派生した意味をも有していると考えることができる。

このfamiliarityという感覚については、様々な分野において研究がなされている。例えば、情報学や言語学という分野においては、語の「親密度」という意で示され、ブランドイメージや広告の親密度の高低について考える研究がなされている。また、社会心理学においても、その好意や愛着を対象に寄せる基になるような感情として考えられている。認知心理学においては、familiarityを、先述した「馴染みのある」の意味に当たるような、recognitionの感覚として用いられていることが多く、何度も見聞きすることによって馴染んでいるという感覚として取り上げられている。このように、日常生活において様々な認知や行動の基礎的な基となるような感覚として取り上げられていることがわかる。しかしながら、この語は、どうしてこれほどまでに分野ごとに様々な意味を付与させることができるのであろうか。また実際にどのような形で体験されているのであろうか。このような問いを発しさせる背景には、familiarityという感覚が個人の主観的な価値付けを示す言葉であることが考えられる。この点を検討するには、辞書を調べるだけでは不十分であり、その語が潜在的に包含している意味やイメージといったものにも考慮す

る必要があるといえよう。そこで、本稿前半では、familiarityの語源や含みを調べることによって、familiarityという感覚の持つ潜在性を見出すこととする。この際、その反対の意味を有する言葉について、つまりunfamiliarの感覚に関する考察からの知見もまた重要であるという考えから、Freud,S. (1919)の『不気味なもの』という論文を参照する。後述するが、当該論文においてFreud,S.はunfamiliarなものへの接近をfamiliarという視点から切り込んでおり、ここにおいてFreud,S.によるfamiliarという考えを見出すことになるであろう。本稿後半では、体験としてのfamiliarityということに迫るために、主観的な体験についての面接を基に考察することとする。

3. 「家庭」のイメージの多義性

先述したように、なぜfamiliarityは様々な意味を付与させうるのだろうか。ここで、この語が有する潜在的な意味内容について考えてみよう。

familiarityの形容詞形は、familiarである。オックスフォード英英辞典第10版によれば、familiar -adj.

1. well known. common ;usual
2. having a good knowledge of.
3. in close relationship

と示されている。また、familiarは、ラテン語 *familia*(family)から派生した *familiaris* (=of a household; domestic) が古フランス語から中英語に入ったものであり、元来、「家族の、家庭の」という意味を含んでいる。長く付き合った結果、家族の者に接するように親しむことによって、家族の者に対して感じるように、「心安く気楽だ」と感じるような関係について意味していることを示している。このように「家族の、家庭の」という言葉こそ、familiarityの語源であるということが理解されるが、この語源こそ、主観性が色濃く反映されるイメージではないかと考えられる。主観は、個人によって異なるものであるから、familiarityが多様な意味を包含することの要因なのではないかということが仮定できるであろう。

そこで、この"家庭"というイメージに迫ってみることとする。この家庭とは、字義的にとれば、夫婦や親子といった血縁・婚姻関係によって、つながれた一つの小グループを示している。この否応なく、運命的に定められたつながりは、強固な固さをもったまとまりであると考えられるであろう。

また、先述した英英辞典の引用において、familiarityという感覚は、closeという関係の中で体験される感覚である。closeは、関係の緊密さや距離的な近さを示す語である。家庭イメージにおける「近さ」について考えるならば、強固なつながりは、近いという形で距離を測ることができないほど、密着した自己と対象との関係として見出すことができるのではないだろうか。しかもその強固さは、ほかの対象にくらべて、はるかにその度合いが高いため、いわば対象の存在を自らの一部であると感じる程であるとも考えることもできるであろう。この密着性は、一方では、自らが家庭から外に出て行動していくための、大きな「守り」ともなりうる。Bollnow(1963)は、空間論の立場から、家が自己にとって体験の中心であり、外から防御される安らぎの空間であるとしている。つまり、家が自らを守り、保護するものとして機能し、中心となることによって、

自己の体験はなされるのである。こうした、あたかも自己の一部であるかのような密着性と「守り」を持つ家庭は、どのような感情を持って心的に体験されるのであろうか。

ここで、もう一度、familiarityという地点に戻り、その「親しさ」という対象に対する感情に焦点を当てるならば、James,W.(1982)の見解が参考になるであろう。

私自身の過去の経験は、私が他人に起こったと考える経験にはみることができない"暖かさ
親しさ"をもって表れる。(中略)私の現在の客我は暖かさ
と親しさを持って感じられる。

James,W.は、ここにおいて、客我として自分自身が対象と異なる存在としてあるときに起こる感覚としての「暖かさ
と親しさ」を言及している。さらに、自分自身の経験という地点においては、他の対象よりも強い形でこの感情が表れることを述べている。自分にあたるものが対象となる場合についての強いfamiliarな感覚は、先ほどの家庭のイメージにおける、自己とほぼ一体となすものとの密着性として考えることもできる。それは、「近さ」の度合いが強いほど、そのfamiliarityは強力さを有して見出しうるのである。このように、家庭というイメージからは、その言葉の使用に対象を必要とする感覚としてのfamiliarityにおいては、その心的な近さによってもたらされる感覚であることが見出せるであろう。しかしながら、この家庭というイメージは、果たして密着した関係によって、行動していく主体の「守り」として体験されるだけであらうかという疑問もわく。なぜなら、現在の事象をみるに、その密着したつながりは、同時に、主体の「縛り」ともなって、家庭の外に出て行くことを阻むようにネガティブに体験されるであらうことも予想されるためである。そこで、さらに異なる側面への検討を行うために、次章では、反対語であるunfamiliarなものとの対照から検討を加えることとする。

4. unfamiliarの側面～Freud,S.『不気味なもの』より

unfamiliarであるということはどのようなことなのであろうか。ドイツ語のunheimlichは、英語のunfamiliarであると同時に、不気味なという意味を存している。Freud,S.(1919)は、『不気味なもの』という論文において、不気味なという感情を引き起こさせる中核にあたるものは何かということについて大きく二つの手法によってその答えを導き出そうとしている。一つは、辞書を具にあたり、言葉の発展を論じていくことであり、もう一つは、不気味なものの感情を呼び起こす様な事例を集めることである。それらを違わせることなく、Freud,S.は、この手法を文学的な形で、結論へと織り成していくのである。まずはそれぞれの手法によるFreud,S.の考察を概観していくこととする。

4-1. 「unheimlich(不気味な)」が意味するもの

Freud,S.は、unheimlich(不気味な)というドイツ語が、明らかに「heimlich (我が家の)、vertraut(馴染みのある)」の反対語であることを示した上で、「不気味な」感覚を引き起こす中核には、「まさに知られておらず馴染みがないからこそだ (p.5,傍点引用)」という予想を踏まえつつ、より体験的なニュアンスを求めて調べ始める。その中でheimlich (“馴染みの”) という語の著作における判例を引き出しながら、反対語であるはずの“不気味な”とシンクロするような意味、つまり、隠されたもの、秘密にしていたものという意味の領域を明らかにするのである。ここで、heimlichは両価性に向けて意味を発展させ、反対語のunheimlich と重なり合うような意味を包含するようになるのである。

この両価性に意味を発展させてきたheimlichというドイツ語に沿う英語がfamiliarityであることを考えるならば、不気味なものを知るために反対語を調べて重ね合わせたFreud,S.とは逆方向に、familiarityは、unfamiliarの意味を持ち合わせる語であると考えられる。

4-2. 不気味な感情の中核としての反復

Freud,S.は、次の手法として不気味なものに関する事例を用いた吟味を行っている。つまり、『砂男』という作品を取り上げ、さらにドッペルゲンガーをモチーフに同じ事態の反復こそが不気味な感情の中核として存在するというを示しているのである。

同じ事態の反復というこの契機が、不気味な感情の源泉として誰からも認められることは、おそらくあるまい。しかし私の観察では、それは一定の条件のもと、一定の状況と結びつくと、疑いの余地なく不気味な感情を引き起こす。(中略) 意図せざる回帰という性格を今ここに描き出された状況と共有していれば、それ以外の点では根本的に異なっているにせよ、やはり寄る辺なさと不気味さというこの同じ感情を結果として伴うのである。(p.249-250)

Freudは、抑圧とそれによる反復、回帰を不気味なものという観点から論じたのであるが、ここで見出されている、「反復」に目をむけてみるならば、いみじくもここで反復という形で馴染みのある構造を繰り返し起こしているということが窺える。つまり、ここで、予想されていた結論である不気味なもの、真新しく、体験されていないものであることへの焦点付けをくつつがえし、「馴染みのある」地点にもう一度帰ってきているともいえるのである。ここで考えられる不気味さは同時に馴染みのあるものから感じられたものであり、そこに隠されていたという形をとりながらも、しかし馴染みのあるものが不気味なものに、さらに不気味なものが馴染みのあるものに容易に反転する構造が示唆されている。

このように、familiarityは、unfamiliarityと関連し、また容易に反転する可能性を秘めた言葉であるといえるだろう。先述した家庭というイメージにおいて、心的な近さとして経験される次元について言及したが、これは、また同時に、心的な遠さの次元も含む、近くて遠いというものでもあるのではないかということが考えられる。しかし、この「心的な近さと遠さを併せ持ったものとしてのfamiliarity」に対する考察は、まだ仮想の段階に過ぎないといえる。ここまでの字義的な分析を踏まえ、実体験としてのfamiliarityを挙げることによって、この仮想の検証を行っていくこととする。

5. familiarity体験としてのデジャヴ体験

デジャヴ体験(déjà-vu experiences)は、もととなるdéjà-vuというフランス語にも示されるように「既に見ている、既に体験している」という感覚を主観的に感じるという現象である。日本語では、既視感・既知感と呼ばれることが多いが、筆者は、このフランス語の音韻的なニュアンスによって、多くの人に知られている現象であると考えているため、以下、デジャヴ体験と呼ぶこととする。では、このデジャヴ体験とfamiliarityは、どのように関連付けることができるであろうか。

デジャヴ体験は、Augustinusなどのギリシャ哲学の時代から人々の心を捉え、それをめぐって議論がなされてきた。「デジャヴ体験がどうしておこるのか」という問いに、脳科学、認知心理学、超心理学など様々な角度からの検討がなされたが、どの見解もそれを全面的に指示する

ものには至っていないのが現状である。その一端を担っていると考えられるのが、デジャヴ体験の持つ、主観性の問題であろう。デジャヴ体験の定義としてよく知られ、また一般的に使用されているのは、Neppe(1983)による定義である。

any subjectively inappropriate impression of familiarity of a present experience with an undefined past experience

(過去との関連がない出来事に遭遇した時に生じる、すべての主観的で不適切な懐かしさの感情) このように、Neppeは、その主観性やfamiliarity(定義の日本語訳は、足立ら(2001)によるものである。足立は、familiarityに懐かしさという日本語をあてている。)を組み込みながら、これまで研究者個人でなされてきたデジャヴ体験の定義を、それらの体験特徴を体系化し定義づけた。この際、Neppeは、他の語句と同様にfamiliarityの語句の選定にも注意を払っている。Neppeは、familiarityの語を採用した理由として、recognitionやacquaintanceの語とは、いかに体験が異なっているのかに言及し、そうすることによって同時にこの体験の持つ特徴を浮かびあがらせている。まず、recognition(再認)との比較において、recognitionは、同一化を暗示するが、デジャヴは、それほど強い動機付けのない、familiarityを暗示すると言及している。これは、同一化や再認にいたらないfamiliarityの曖昧さを示しているのではないだろうか。またacquaintance(既知)との比較において、より強い感覚を伴う体験であることに触れている。このような語の選定において、familiarityという語は、体験における対象とのあいまいな同定と強い感覚の表現として用いられたものであり、デジャヴ体験の特徴にもっともよく根ざした感覚を示す言葉としてのfamiliarityというものとして、扱われていることが理解できる。ここにおいて、すなわちfamiliarityは、個人個人の体験の性質の面から見る時、デジャヴ体験を言い表すのに十分な感覚であり、Penfield(1959)が、デジャヴ体験とはfamiliarityの体験であると述べたように、デジャヴ体験の中心的な感覚としてfamiliarityがあると考えることができる。ここでのfamiliarityにこめられた思いを感じ取るならば、familiarityとはただ単純に先述したような字義的な意味合いにおける"何度も認知しているという親しみ"だけでなく、より主観的な体験に根ざした、体験的な言葉であると考えることができるであろう。よって、この体験的な言葉であるfamiliarityをデジャヴ体験の様相から検討を加えることも妥当であると思われる。したがって、次章では、デジャヴ体験の具体例を取り上げることとする。

6. デジャヴ体験の様相

6-1. 目的と方法

目的：デジャヴ体験について、その体験内容や、どのように主観的に体験されたかということについて検討することを目的として調査を実施した。調査は、質問紙調査と質問紙の内容についての半構造化面接の2段階であった。半構造化面接では、被検者にデジャヴ体験をもう一度語ってもらうことを通じて、質問紙によって得られなかった、体験における細かなニュアンスを詳らかにすることを目的とした¹⁾。

(1) 質問紙調査

実施：平成15年10月から11月にかけて行われた。X大学校舎内において学部生を中心に無作為に配布したものを、後日回収箱に提出してもらう形式をとった。(回収率46%)

被検者：X大学校舎で授業を受講する大学生123人（男性58人、女性65人、平均年齢20.8歳）

方法と手続き：質問紙の構成は、デジャヴ体験について、「実際にははじめてのことであるにも関わらず、以前にまったく同じような出来事、考え、感じなどを経験したような気がする"感じ"」と簡単に定義し、予備調査から得られた様々な例を挙げ、その上で、体験の有無を尋ねた。また、あると答えた人には、「あなた自身が体験した1つのデジャヴについてイメージしてください。そして、その状況を思いつくままにくわしく書いてください（下線教示通り）。どのような体験でしたか？（いつ、どこで、だれと、など）をくわしくかいてください。」と教示し、自由記述を促した。またその際の気持ちについても欄を設けて答えてもらった。さらに、この体験についての気持ちを予備調査をもとに構成された気持ちがどの程度感じられたか、5段階で評価してもらった。その後、その体験がどのように自己に体験されたかを測るために用意した体験様式を選択してもらい、その理由を求めた²。

（2）半構造化面接

実施：質問紙調査後、約2,3週間の期間を設けて個別に実施し、面接調査に参加するかどうかは被検者に委ねられた。面接室は静かで適度に明るい場所であり、被検者と調査者が向かい合う形で面接を行った。

被検者：質問紙調査で体験があると答えられ、インタビュー調査の協力に同意された21名（男性6名、女性15名 平均年齢20.5歳）であった。

手続き：質問項目は、定められており、調査者が場合に応じて順番を変え、全ての項目について答えてもらった。はじめに、「先に質問紙で答えてくださった、デジャヴ体験についてもう一度くわしくお聞かせくださいますか」と質問し、もう一度体験を思い出し、語りなおしてもらった。その上で、その時の気持ち、どのような体験をしたのかという質問を続けた。

6－2．結果と考察

（1）質問紙調査

123人中、3人のデータに欠損があったため、このデータを除く120人のデータで分析を行った。その結果、具体的な内容は思い出せないが体験したことがあるという人を含め、体験したことがある人は、95人であり、体験率は、79.2%であった。これは、過去の研究が行った調査での体験率が平均67%であったこと（Brown,2003）と比較すると、高い結果となり、被検者が大学生であることや回収率の影響も窺われた。

気持ち項目を主成分法で因子分析したところ、暖かさや懐かしさ、快さなど、先述したJames, W.の記述に沿う"親しみ"の感覚を示すものが第1因子としてまとめられた。この結果は、デジャヴ体験において、この親しみの感覚が中核に位置していることを示していると考えられた。

このように、質問紙調査において中核となっている親しみの感覚が見出され、また多くの体験記述が得られたが、familiarityをどのように体験するかということを検討することは、質問紙調査では、限界があるといえよう。そこで、半構造化面接における体験様式の語りを含め検討することとする。

（2）半構造化面接

半構造化面接では、21のデジャヴ体験事例が得られた。体験を検討するという目的のもと、体

験の描写が比較的詳細であったものを含め、10事例を表1に示す。

表1 デジャヴ体験事例

1	自宅で母親と話していたとき、「この会話、前にもしたことがあるな」と感じ、母親が次にする動作や言う言葉がわかった。そして実際母親はそのとおりの反応をした。自分自身の言葉にも聞き覚えがあり、頭で「あ、私次にこう答えるんだ。」と思ったとおりに口が動いていた。
2	家族で食卓を囲んでいるとき、父が何かを話し、私が何か食べ物をつまんだとき、これは前にも体験したことがあると思った(話の内容や私のつまんだ食べ物は忘れた)もちろん日常のごくありふれたシーンだがそれでも瞬だけが明確に記憶にあって今繰り返しているような感じにとらわれた。)
3	具体的にはっきりと覚えているわけではないのですが以前友達と話しているときにデジャヴを経験した。同じ状況で同じ言葉を言われたように思った。友達をも含んだ背景が一枚の絵となっていてその絵を以前にも見たことがあるように感じた。地元で電車に乗っていたとき、中学の同級生と会って「変わらないねえ」などといわれ、会話をしているときに夕日が窓から差し込んできてちよつとまぶしくてその時のその絵がどこかで見たことがあると感じた。
4	高校のとき、たぶんみんなが帰ってしまった後で、何人かで集まって、はなしをしていたが、ちょうど景色が、山の上の学校だったので、あの平地ではあんまみえないんですけど、山の上では、空気が、そらに変な色に染まる気がして、そのときになんかみおぼえがあるなとおもったんですけど、この会話がこのとき起こったということを感じた。
5	先日の夜に買い物が終わって外に出ようとしたときに外の暗い感じとそのとき友達としゃべった「どっちに自転車置いたっけ？」という言葉の前に体験したことがあると感じた。
6	数年前だったと思うが、自宅のリビングで兄と談笑していたときふと以前にも同じシチュエーションがあつてこの後に何かがおこるはずだと思ったのですが結局思い出せませんでした。
7	クラブの練習後、同じような周囲の状況で同じような会話をした。たとえば、近くを新幹線が通り過ぎるときに同じ人の話をしていたり。
8	実家の近所の公園を散歩していたとき(一人で、夕方)高校時代、週に3回位は散歩していたので似た道を通るのだが、空の色、道、風景、明るさなどが以前に経験したものと同じく感じられた。
9	旅行で、町歩きをしていた途中、民家が立ち並んでいる交差点で見た風景を以前に見たことがあるきがしました。
10	高校の合宿で。宿舎の廊下のソファーに座って友達と話していたとき。廊下はレンガ色のじゅうたん。左をふとみたとき。

これらを概観すると、多くの人が、その体験を旅行中や見知らぬ土地に行ったときなど、初めての場において体験されるものではなく、友達や家族と話しているときや帰り道、放課後といった日常的な場において体験されていることがわかる。事例9、10は例外的であるが、事例10に示される"合宿"といった場もある意味日常的な場として捉えることも可能であるだろう。また、この日常的な場において、誰かとともに居り、風景や会話その全てが合致した状態にデジャヴを見出しているということも特徴的であるように思われる。よって、これらの特徴を有し、典型的な日常的な場において体験された被検者の中から、2名の方の事例について、面接の中で答えられた体験の感覚とともに検討を加えることとする。

(3) 事例1；Aさん(20歳 女性)の体験

Aさんは、次のような体験を報告された。

自宅の対面式のキッチンのところで母親と話していたとき、この会話前にもしたことがあるなど感じ、母親が次にする動作や言うことがわかった。そして母親はそのとおりの反応をした。自分自身の言葉にも聞き覚えがあり、頭で『あ、私次にこう答えるんだ』と思ったとおりに口が動いていた。

この体験は、母親の言葉だけでなく、自分自身の言葉をも聞き覚えがあるというデジャヴ体験である。キッチンという日常的な場において、「聞き覚えがある」という形のfamiliarityを体験されている。この「聞き覚えがある」という体験について、Aさんはインタビューの中で、「ふわっと体験が自分に近づいてくる、働きかけてくるような感じ。体験をして、もやもやとしたひっかかりの感じがした。」と体験をめぐる感覚を述べられた。Aさんの、この「体験が近づいてくる」という感覚とは、familiarityの有する心的な近さという側面であろうことが推測される。さらに、それは、近さであるが、同時に"近づいてくる"として表される、運動性を持ったものであると考えることができるであろう。何かが、"近づいてくる"というとき、近づくものである対象を認識するようなものが存在し、さらにその対象の"近づいてくる"先にある主体というものが存在しなければならない。Aさんが、こうした近づきのうちに、自ら体験している主体というものを意識しているがゆえに、このような対象を見出したのであろう。

しかしながら、その体験は近づいてくるだけでなく、Aさん自身もこの体験の中で、取り込まれて体験されている様子も見えて取れる。「自分自身の言葉にも聞き覚えがあり、頭で『あ、私次にこう答えるんだ』と思ったとおりに口が動いていた」という記述の中には、対象を認識しているはずの主体が、頭で考えていることと身体との乖離とその状況自体を主体がコントロールできないという有り様がみてとれる。いわば、身体の自動性ともいえるこの主体のコントロールが効かない事態において、主体は、自らの身体であるのも関わらず、制御不可能なあたかも他者の身体であるかのように感じられることであるのかもしれない。それは、James,W.が語るような自分自身に属するものとしての、「暖かさ」と親しさ」というような感覚ではない、「遠さ」をもったようなものでもある。つまり、Aさんは、対象が"近づく"という近さの感覚と同時にそのどうしようもない遠さの感覚を体験されたと考えられる。Aさんの事例において、近さと遠さを併せ持ったfamiliarityという感覚を見出すことができるであろう。

(4) Bさん(24歳 女性)の体験

Bさんは次のような体験を報告された。

家族で食卓を囲んでいるとき、父が何かを話し、私が何か食べ物をつまんだとき、これは前にも体験したことがあると思った。もちろん日常のごくありふれたシーンだったが、それでも一瞬だが明確に記憶にあって、今繰り返しているような感じにとらわれた。

この体験は、「父が何かを話し、私が何か食べ物をつまんだ」その状況自体が以前に体験されたと感じているデジャヴ体験である。この体験についてBさんは、「自分がある意味その場を支配しているような、されているようなアンビバレントな感じだった。自分にしかこの感じはわからないというような疎外感を感じた。時差ぼけのような時間空間のゆがみを感じた。」と体験をめぐる感覚として話された。この体験において、Bさんは、先述したようなAさんのコントロールの効かなさをよりはっきりとした感覚として捉えられているようである。それは、記述における「今繰り返しているような感じ」やアンビバレントな思いという点を考慮しても明らかであろう。

その場を支配（コントロール）できることとできないことの両極をゆらめき、それでもそこにいる中で、Bさんは「自分にしかこの感じはわからないという疎外感」を感じている。この「疎外感」とはどういったものであったのだろうか。

「自分にしかわからない」という感覚から見出せるのは、その対象が、はっきりと自分自身のうちに帰属しているという点である。それは、Aさんとは異なり、James,W.が述べるような「暖かさと親しさ」を持って、感じられるべきものである。しかしながら、Bさんは、ここで「疎外感」を感じる。この感覚が、他者にはわからないだろうという思いとともに自分だけに帰属するこの対象によって、他者からの疎外感を感じるのである。自分という主体だけに帰属しているという、対象が主体に近接する体験は、他方において、同時に「遠さ」の感覚を抱くとも考えられる。

（５）両者における「遠さ」

さて、このように見出されたAさんにおける「遠さ」とBさんにおける「遠さ」は同質のものであろうか。Aさんは、主体に属するはずの身体がままならないという意味での遠さであるのに対し、Bさんは、このような主体がコントロールできる、できないという触れ幅でゆらめくことによって、このコントロールという点においては、「遠さ」に極化しないところで揺らいでいる。さらに、「近さ」という動きもみせるために、それによって起こる、他者や他の状況との疎外感という「遠さ」を感じているといえる。このように比較してみると、Bさんは、主体と自分以外のものとのはっきりとした「遠さ」に言及しているが、Aさんはそのことに言及していないという意味で、両者の「遠さ」とは全く別種のものであると考えることもできる。しかし、Aさんにおいて、「ふわっと近づいてくる」体験に主体が組み込まれてしまったように、Bさんもその体験の中に包みこまれることによって、他者との境界がはっきりとしてしまったと考えることができるのではないだろうか。体験に包みこまれることによって、Aさんは身体の自動性を感じ、Bさんは、包まれるという点に力点が置かれることによって他者との違いが意識されているのだと考えられるならば、AさんとBさんは、この「近さ」と「遠さ」に揺るがされざるをえないその「包む」ものを体験していると推定することができる。

7. familiarityと不可避性

事例において見出された、「包む」ものとは何なのだろうか。デジャヴ体験について、そのものが持つ避けられないものとしての側面について言及しているのは、Bergson,H.(1908)である。Bergson,H.は、デジャヴ体験について、「私」を決定するための「私」についての記憶探しが蔓延している状態であるとし、それを現在の私が、せずにはいられないような状態になっているという形で不可避性について言及している。このように不可避的に、体験に包み込まれ、組み込まれ、他者と隔絶し、近さも遠さもはっきりとしない、そういった場に自らが置かれるとき、Aさんのように「もやもやした、ひっかかりの感じ」を感じることもあろうし、あるいは、Bさんのように「時空間のゆがみ」を感じることもあるであろう。このとき、日常的な場において、いつものような日常を反復することは許されず、「もやもや」や「ゆがみ」の感覚を抱えることになる。

このような不可避的な体験によって、反復に対する何らかの動きがおきるようなあり方は、前

述したFreud,S.の論述の中にも読み取ることができる。それは、意図せざる反復によって、結果として引き起こされた「よるべなさ」と不気味さの感情である。この「よるべなさ」とは、精神分析で言うところの母親にひたすら秩序づけられるしかなく、自らはなにもできない無力さである。この無力さは、Aさんが感じられた「口が動いていた」という事態そのものを指すものであろうし、Bさんの「その場を支配しているようなされているような感じ」そのものであろう。また、「よるべなさ」は「寄る辺なさ」であり、自らの立ち位置だけでなく、それを補い寄る辺となるべき他者の存在との隔絶である「疎外感」そのものであると考えることができるであろう。

このように、Freud,S.が挙げたような「よるべなさ」とデジャヴュ体験事例で見出された感覚が同質のものであると考えるならば、ここでもまた不気味さとしてのunfamiliarityとfamiliarityとは、ほぼ似たような意味を含むものであるということが、この語を示すような体験レベルにおいても見出すことができるであろう。しかしながら、一方は、何度も経験しているというところからくる「よるべなさ」なのであり、他方は、一度も経験したことがないことからくる「よるべなさ」である。果たして、この経験という側面を無視してもよいのだろうか。

デジャヴュ体験の事例について考えるならば、体験が起きている場は、実は日常的な場であったことが思い出される。日常的に経験されている場において起こる体験は、事実的なことで考えるならば、実際には何度も経験していることであってもおかしくはない。何度も経験している事象にふっと目を留めた時、そのこと自体がもつ存在に圧倒され、主体が避けることができない形で主体に迫られたのではないだろうか。つまり繰り返しと反復を何度も日常的な次元に落とし込むことによって、つまり、幾度もfamiliarityを体験させられ、近づけさせられることによって、主体は「よるべなさ」を体験させられるのではないだろうか。この接近の強制とよるべなさについて、松浦（2008）は、折口信夫の『死者の書』で繰り返される「した した した」という水の滴りの音が繰り返すことによる接近の強制と「よるべなさ」という点から言及している。「した」という擬態語の反復は、存在の判然としない、「彼の人」の近づきを身体レベルの密着した形で強制し、その密着さの中では身動きがとれないほどの「よるべなさ」の中に陥れられる。このモチーフは、超自然的であるとも一方では考えられるが、しかしながらこの反復が持つ強固な接近の強制こそ、主体の「よるべなさ」にも通じるものとして考えることはできるのではないだろうか。

8. 近さ、遠さを超える次元

これまで見てきたように、familiarityという感覚は、字義的には、馴染みや一度見聞きされているもの、またその親しみや緊密さという感覚で捉えられているが、その感覚が包含するものはより多義的で、対象との近さと遠さの両方を併せ持つものであることが見て取れた。また、unfamiliarityとして見出せるようなものとも類似するような、とても不可避的な強制力を持ちながら、主体を「よるべない」次元に包み込むということを考えることができる。これまでの議論において、その「よるべなさ」は赤ん坊の無力さや、強制的な対象の密着の中で何もできなくなる主体の揺らぎなど、どちらかというと、ネガティブな意味合いにおいてfamiliarityの持つ不可避性を捉えてきたように思われる。

しかしながら、この不可避性は、同時に、主体が主体となることが強制されない次元と考える

こともできるであろう。ここにおいては、近代的な主体—対象という区別は剥奪され、主体と対象とが渾然一体となった世界の有り様が見出せるのである。この渾然一体の世界のうちでは、近さや遠さといった、近代的な遠近法は崩壊し、主体が主体として対象と区別され、閉じられた次元から、世界のうちに溶け込むというprimitiveな次元に開かれることになるのであろう。日常生活において、このようなprimitiveな世界に不可避免的に包まれることは、一方ではBさんのように「時間空間のゆがみ」として体験されることであろうが、他方では、現在の主体からの解放として感じられたゆがみであるとも考えられる。主体の解放は、世界を一変させるような感覚としても捉えられる。ここにおいて主体は、その新たな世界にもう一度降り立つことが必要となるとも考えられる。familiarityを感じる体験を、そういった世界変化とそれに伴う揺らぎや開きの視点から考察することも可能であるだろう。クライアントが箱庭のアイテムという、面接室に日常的にあったものを、自ら見出し触れる時、そのクライアントが降り立った世界を考えることによって、クライアント自身の揺らぎや体験の有り様も考えることができると思われる。

9. 引用文献

- 足立直人・足立卓也・木村通宏・赤沼のぞみ・加藤昌明 2001 既視感 (deja vu) 体験評価尺度日本語版の作成とその妥当性の検討, 精神医学 43(11),1223-1231.
- Bollnow,O.F. 1963 *Mensch und Raum*, W.Kohlhammer GmbH, stuttgart (大塚恵一・池川健司・中村浩平訳 1978『人間と空間』せりか書房)
- Brown,A 2003 *A Review of the Déjà vu Experiences*, Psychological Bulletin, 129(3),394-413.
- Freud,S. 1919 *Das Unheimliche*, Imago, 5(5-6),297-324. (藤野寛訳 2006 不気味なもの『フロイト全集17』岩波書店)
- James,W. 1892 *Psychology Briefer Course* (今田寛訳 1993 『心理学』第12章 岩波文庫).
- 松浦寿輝 2008 『増補 折口信夫論』ちくま学芸文庫
- Neppe,M. 1983 *The psychology of the déjà vu : Have I been here before?* Johannesburg,Witwaterstand University Press.
- Penfield,W.& Roberts,L. 1959 *Speech and brain-mechanisms*. Princeton Univer.Press.

¹ 半構造化面接においては、面接後に家屋画も実施した。これは、デジャヴ体験がある人と体験のない人の差異を測る為である。しかし、本論文においては、デジャヴ体験について詳らかにすることを目的とするため割愛する。

² 体験様式を選ぶ三項目は、絵と文（体験に自分が直接参加している/体験に参加している自分を第三者の視点で眺めている/体験に自分がでてこない）で説明する形をとった。

(心理臨床学講座、博士後期課程3回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

Consideration about the Familiarity and the Subjective Distances: From the Aspect of Déjà Vu Experiences

KATO Nanako

This paper considered familiarity. Familiarity is the feeling many people feel daily and many researchers of various fields have considered it. A dictionary defines it as a feeling of knowing others well. The source of the familiarity is the meaning of "family" in Latin. From this family image, it contains a two-sided meaning. One image is nearness distance, for example, from its protector aspect. Another image is the far distance, for example, from its compulsory aspect. From the article by Sigmund Freud (1919), familiarity is similar to the unfamiliarity. The article suggests the possibility that familiarity has two-sided meaning. Thus, I discussed the meanings of familiarity through the survey of déjà vu experiences. The central idea of déjà vu experiences is familiarity. The survey consists of questionnaire of free description about déjà vu and interview. From this interview, I showed two cases of déjà vu experiences. These cases suggest familiarity has two aspects; near and far distance, and also a further aspect which inevitably throws one into a place transcends the distinction between near and far distance. When a person experiences familiarity, he or she experiences a change of the self-world.